池袋のうちあけ話

小池邦夫のうちあけ話

目次

発刊にあたって（狛江市長）……2

小池邦夫のうちあけ話 1～24 ……4
（小池さんが半生を語り、聞き書きをまとめました）

小池邦夫作品集 ……52

あとがき ……54

小池邦夫　年譜 ……56

表紙題字　小池邦夫

01 文化庁長官表彰「配達芸術」の評価に感激 ……4
02 運命の出会い 三輪田米山の字に衝撃 書家志す ……6
03 一日一信 臨書に反発 親友への手紙に活路 ……8
04 邦夫ノート 20代のはがきに浮かぶ焦り ……10
05 師（上）瀧井孝作「手紙も文学だ」教えを糧に精進 ……12
06 師（下）中川一政 心酔、「我を学ぶ者は死す」で決別 ……14
07 不退転 あえて大学を中退 背水の陣 ……16
08 転機「銀花」の6万枚と格闘 ……18
09 失意と再起 妻の急死でどん底 再婚し気力甦る ……20
10 始動「銀花」機に雑誌の連載、郵便局で教室 ……22
11 協会旗揚げ 主婦層の心つかみ、月刊誌も発行 ……24
12 師友・緒形拳 馴れ合わず四半世紀心通わす ……26
13 海外雄飛 筆墨の故郷・中国で初の交流展 ……28
14 ブーム到来 NHK「趣味悠々」で人気沸騰 ……30
15 美術館誕生 富士山の「気」を浴び手書き文化発信 ……32
16 東日本大震災 魂を揺さぶられた被災地との交流 ……34
17 発祥の地 狛江をまるごと手書きの美術館に ……36
18 記念日制定「ふみ」と読む2月3日に「福」配り ……38
19 松山と狛江 古里の書家顕彰 心癒す多摩川 ……40
20 上武大学（上） 授業で〝種まき〟若者の裾野広げる ……42
21 上武大学（下） 公開講座でがんとの闘病告白 ……44
22 武者小路実篤 迷った時に立ち戻る〝心の師〟 ……46
23 夫婦愛 妻へ送った2万枚の〝ラブレター〟 ……48
24 これからだ！ 狛江から世界へ夢広げる ……50

狛江市内の仕事場にて

発刊にあたって

昭和56年、狛江郵便局において日本で初めて開催された絵手紙教室。その時、講師として指導されたのが小池邦夫さんでした。それから40年以上にもわたり、小池さんはこの狛江の地で「絵手紙文化」を大切に育まれてきました。

そして、狛江で生まれた「絵手紙文化」は全国へと広がっていき、狛江市も多くの方々に「絵手紙発祥の地－狛江」として認識されるまでになりました。

一年前の令和5年8月31日、その絵手紙創始者であり、狛江市名誉市民でもある小池さんの訃報が飛び込んでまいりました。あまりの突然の知らせに、思わず言葉を失った記憶がまざまざと思い出されます。

小池さんとの出会いは、私がまだ市職員だった時代にさかのぼります。心を揺さぶる数々の言葉や身体のそこかしこから熱くみなぎる活力に圧倒され、一瞬でその人柄に魅了されました。

小池さんはことあるごとに、「小さい狛江市だからこそ、絵手紙を取り上げてくれた」と仰っていました。しかし、絵手紙そのものの可能性や魅力がなければ、ここまで大きな文化・芸術へと成長することはなかったはずです。

今でも狛江市内を見渡すと、街の至る所で絵手紙が息づいています。街中に漂う文化の香りと狛江ならではの温かみは、絵手紙によるところが大きく、狛江のまちづくりの大きな一翼を担っていただいた小池さんへの感謝の気持ちは、今なお尽きることはありません。

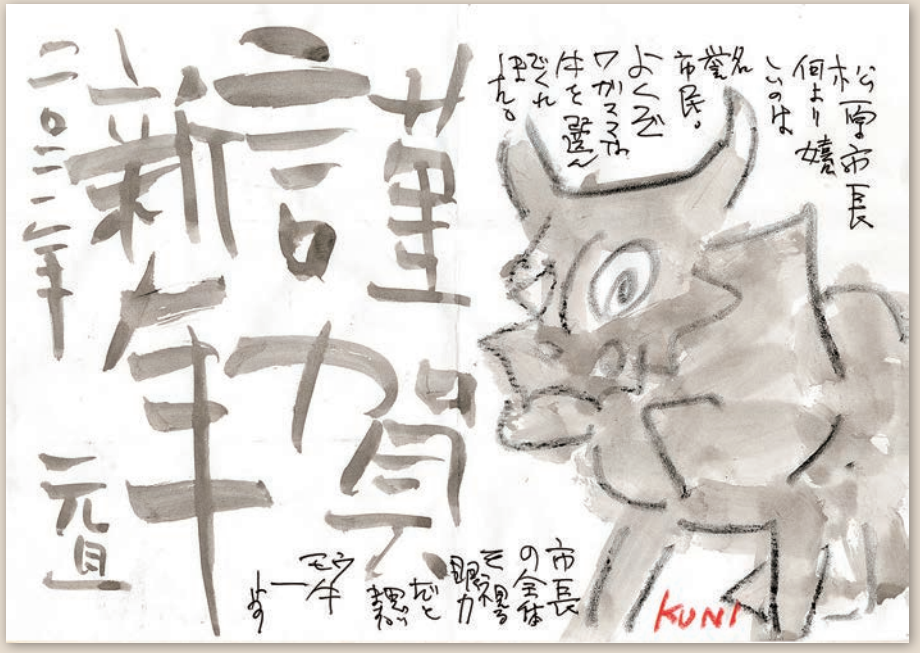
本書「小池邦夫のうちあけ話」は、広報こまえ令和5年4月1日号から開始した連載記事を中心に、小池さんの足跡と絵手紙の魅力を多くの人に届けることを目的に制作いたしました。

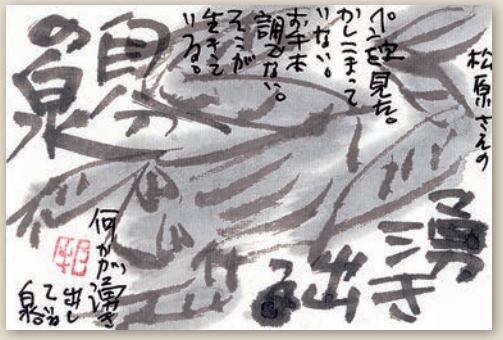
制作にあたっては、奥様の小池恭子さん、連載記事を執筆された元朝日新聞記者・佐藤清孝さん、そして日本絵手紙協会の皆様に多大なお力添えを賜りました。この場をお借りして、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

この小冊子が、一人でも多くの方に絵手紙の軌跡を知っていただく機会となることを願ってやみません。そして願わくば、仕事場を天へと移し、今も絵手紙をかき続けているであろう小池さんの手元に、どうかこの一冊が届きますように。

狛江市長　松原　俊雄

松原市長宛てに届いた小池邦夫さんからの絵手紙





01

文化庁長官表彰

「配達芸術」の評価に感激

絵手紙作家の第一人者として絵手紙の普及に様々に取り組み、活動を牽引した貢献に対して2021年度の文化庁長官表彰を受けた

文化庁次長からの通知がきて驚きました。僕は絵手紙を20代半ばから始め、今では全国に愛好家が100万人といわれているけど、やってきたことは賞とは無縁だし、一生もらえないと思っていましたから。まして文化庁からですからね。埒外（らちがい）というか場違いというか、考えられないような出来事でした。

表彰者の中には、歌舞伎俳優の市川海老蔵（現・團十郎）さんやピアニストの仲道郁代さんら著名な芸術家もいらっしゃいました。実は僕の功績概要も「文化芸術振興への貢献」なんですよ。

絵と書と言葉による絵手紙はいわば「野の花」です。日常の中で咲かしてこそ、美しさがあるじゃないかと思って続けてきました。誰でもかける絵手紙は低くみられがちだけど、一人の相手に送る「配達芸術」だと思い長年やってきたから、そこを評価してくれたうれしさがある。

当日は、作曲家の都倉俊一長官から表彰状を受け取り感激しました。ただ、喜びがじわじわと心に広がってきたのは、表彰式の後でした。なぜなら、全国で絵手紙という花を咲かせてくれている人たちがいてこそもらえた賞だと、実感したからです。妻（恭子さん）と「もらえてよかった」と何度も語り合いました。

表彰状を手に喜ぶ小池邦夫さん（左）と恭子さん　＝文化庁

式の前後、故郷の愛媛県松山市と愛媛新聞からも表彰された

賞状を直接渡したい、と松山市の野志克仁市長と、愛媛新聞の土居英雄社長がそれぞれ狛江市に駆けつけてくれました。松山は俳句の街です。短い言葉で気持ちの高まりを表す絵手紙と共通した文化がある。俳句の松山と絵手紙の狛江が交流し、言葉で温かさを贈り合えたらいいなと夢見ています。

02

運命の出会い

三輪田米山の字に衝撃　書家志す

僕は1941（昭和16）年、愛媛県松山市で生まれました。ミカン畑と田んぼを耕す農家の次男です。3歳上の兄と3歳下の妹、両親、祖母の6人家族でした。

司馬遼太郎さんは「坂の上の雲」で松山について、「領内の地味が肥え、物実（ものな）りがよく、気候は温暖で、しかも郊外には道後（どうご）の温泉があり、すべてが駘蕩（たいとう）としている……」と記している

正岡子規や夏目漱石もつかった道後温泉は実家の近くです。いわば温泉育ち。温泉は裸の自分をさらけ出す。絵手紙と共通していますね。帰郷した時は両親とできるだけ一緒に行きました。朝6時の一番風呂に入るんです。大学も卒業できなかった親不孝をちょっとでも消そうと思って。2人とも喜んでくれました。

僕はばあちゃん子でね、農家の手伝いをよくやったけど、祖母にほめられたかったからなんですよ。

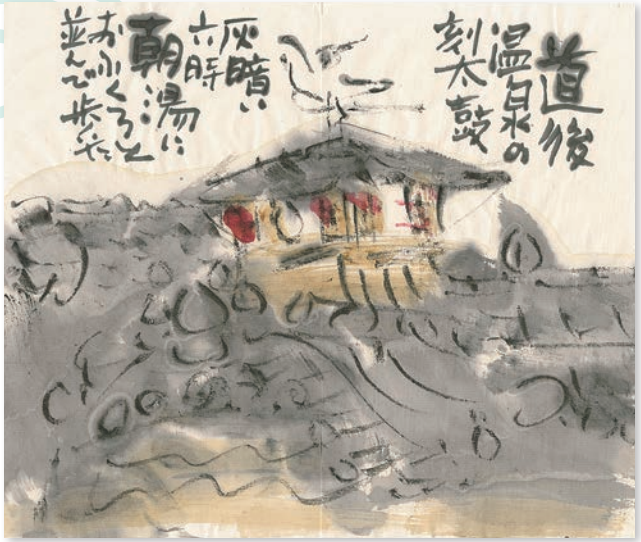
ただ、性格は内気で、子どもの頃は家に客が来ても襖の陰に隠れていました。社交性もない。大人になっても挨拶は苦手で、「こんにちは」の後の言葉が出ないんです。

書道塾に通い始めた小学3年生の時に、近代書の先駆とされる書家・三輪田米山（みわだべいざん）の碑に出合う

生まれつき不器用で塾でも手本通りに書けない。人一倍練習したけど、上達せず悶々としていた頃でした。収穫作業の手伝いでリヤカーの後ろについてミカン山に行く途中、神社の注連石の大ぶりで力のこもった字を見て、その場にしゃがみ込んでしまった。「無為而尊」。読めないし意味もわからないけど、心を揺さぶってくる。人生であんなに心が躍ったことはない。「こういう字を書ける人になりたい」。子ども心に書家になる志を立てました。

後でこの言葉は、飾らないで自然のまま出たものが一番尊いという意味だと知りました。絵手紙運動の「ヘタでいい、ヘタがいい」の原点といえますね。

米山は松山の神社の神官で、独学で天衣無縫の書風を確立しました。気力があふれ出す書で、希望を与えてくれる力がある。松山には米山筆跡の碑や幟（のぼり）などがたくさん残っていて、僕は顕彰活動を続けてきました。米山は永遠のあこがれです。



小池さんの絵手紙「道後温泉の刻太鼓」＝郵研社提供

03

一日一信

臨書に反発　親友への手紙に活路

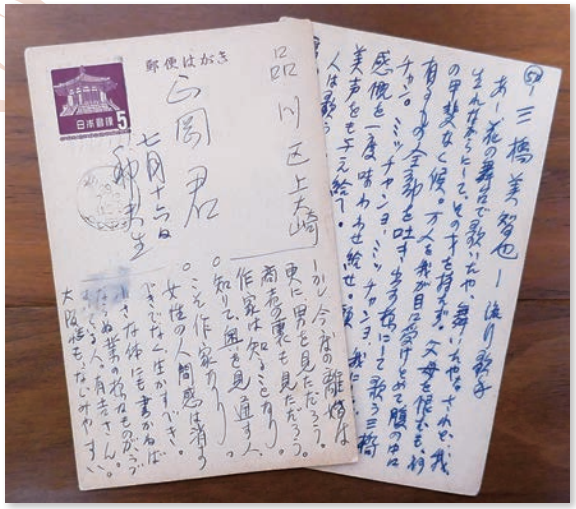
中学3年生の時にも大きな出会いがあった

僕は無口でした。夏休みに担任の先生から届いたはがきに、「君は黙っているが、内に何かを秘めているのを私は知っている」と書かれていた。うれしかった。励まされた。手紙が人を動かす力があることを知ったきっかけでした。

進学した高校は地元の名門・県立松山東。学友たちも驚く二つの「事件」を引き起こす

一つは、2年生の時の「トイレ落書き事件」。当時、僕は短い言葉を書くことで人を発奮させられるんじゃないかと考えていた。そこで、放課後に級友の一人を見張り役にして、学校のトイレの白壁に家から持ってきた太筆で「質実剛健」「初志貫徹」などの言葉を墨書した。後で問題になったけど、担任で書道教師の沢田大暁（たいぎょう）先生がかばってくれたので不問に付されたようです。

もう一つは、3年生の時に〝私設応援団長〟になったこと。トイレ事件もあったから、推すやつらがいたんだね。僕は恥ずかしがり屋のくせに、実は目立ちたいという気持ちもあったんです。夏の全国高等学校野球選手権大会の予選などで、必死に音頭を取りました。その頃ですね、中学、高校と一緒で親友の正岡千年（せんねん）に「わしは、筆一本で立ちたい」と打ち明けたのは。書道は1年生の時から選択科目で学んでいました。



小池さんが23歳の時に正岡さんに書いた手紙。はがきは当時５円だった

東京学芸大学書道科に入学したが、大きな勘違いをしていた

大学名に「芸」が入っているから芸術家を養成する学校だと思い込んでいたら、書道の先生になる勉強をするところだった。世間知らずというか、抜けているというか。

中国古典の臨書の授業が続き、落ち込みました。人まねですから。「俺は自分の歌をうたいたい。それには手紙だ」と気づきました。手紙なら相手は一人。実感を込めて書けます。その気持ちをわかってくれるのは、当時青山学院大学に通っていた正岡以外にはいなかった。

読んだ本、展覧会で目にした絵や書の感想、芸術論……。19歳の時から、臨書で鬱々とした気持ちを吐き出すように、最初は文字だけの手紙を毎日書きました。正岡にあてた「一日一書」の始まりです。

04

邦夫ノート

20代のはがきに浮かぶ焦り

正岡千年（せんねん）さんは小池さんからのはがきをすべてとっておき、21歳～24歳の手紙を「邦夫ノート」として編集した。精神の遍歴がうかがえる

邦夫ノートは、前妻（芙美子さん）との結婚式の引き出物として、学友らが1967年に80部作ってくれました。僕が26歳の時です。ガリ版刷りのB5版で128ページ。知人が1日6時間～10時間も「ガリ切り」をやってくれました。仲間たちの奉仕的な協力で発刊できた本です。

僕は上京して東京・湯島の伯父の家に下宿し、出口の見えない日々を送っていました。臨書の授業に嫌気がさして大学へはあまり行かず、図書館や美術館に顔を出してやるせない気持ちを正岡へのはがきにぶつけていました。邦夫ノートには「僕もヘタだが、書の中に自分を表出しようとアセッテいる」と書いた文面があります。もがいていたな。

邦夫ノート。ガリ版刷りで、当時のやるせない気持ちがつづられている

小池さんの下宿を訪ねた正岡さんは、洗濯バサミに吊り下げられた真っ黒な新聞紙の束を目にする

墨で縦線、横線、渦巻線を引く練習のため、新聞紙に何度も塗り重ねました。この三つの線を練習すれば漢字も平仮名も英語やローマ字も書けるからです。活字が一番読みやすいと思っていたので、筆線の鍛錬をひたすら続けました。運動選手が肉体を鍛えるように心の筋肉をつけるためです。僕の特徴の力強く彫り込んだ線の原点になりましたね。

棟方志功さんにも魅せられ、版木を山のように買って模刻をしました。正岡へのはがきにも「棟方志功の版画文字はズバヌケテイル」と書きました。憧れだったんです。

著名人の講演会に熱心に通った。邦夫ノートには「人物シリーズ」として、感想などをつづった100通近くの文面が収められている

当時は毎晩のように無料の講演会があり、新聞で情報をつかんで聴きに行きました。一流の人がどんなことを考え、どういうことを目指しているかをつかみたかった。作家、評論家、画家、学者、禅僧、漫才師、オペラ歌手……。いろんな人から学んだことを血肉にして、話のエキスを正岡に伝えたかったんです。

邦夫ノートは粗削りでも絵手紙作家への最初の一滴になりました。

05

師(上) 瀧井孝作

「手紙も文学だ」教えを糧に精進

人には宿縁がある。小池さんと小説家で俳人の瀧井孝作さん（1894～1984）とは不思議な縁（えにし）の糸で結ばれている

瀧井さんと出会うきっかけをつくってくれたのは、高校時代の書道の教師・沢田大暁（たいぎょう）先生でした。あの「トイレ落書き事件」で僕をかばってくれた人です。1966年、書の雑誌の特集で瀧井さんに会うため上京した先生に同行させてくれるよう頼んだら、快諾してくれました。

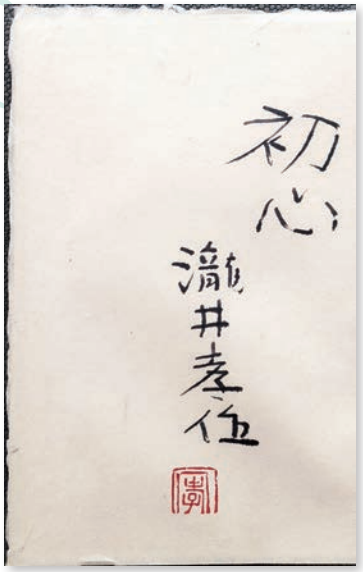
実は、瀧井さんの作品もよく知らなかったんです。でも、ある家で瀧井さんの「無限抱擁」の書を見て惹かれていました。八王子の自宅を訪ねると、中国・六朝（りくちょう）時代の石碑の拓本を見せてくれました。瀧井さんは72歳。僕は25歳。50歳近くも年下の若造に初対面で本物を見せる。その心遣いがうれしかったね。

この時から、瀧井さんとどんどん親しくなっていく

月2～3回、誘いの電話がかかってくるんです。行先は美術館や博物館、デパートの展覧会でした。恋人の電話を待っているようにいそいそと出かけました。会うと質問攻めにしました。「文学とは？」「芸術とは？」……。どんな質問にも丁寧に答えてくれました。手抜きはいけない、いい加減な仕事をしてはいけない――。多くのことを学びました。

瀧井さんが兄事する志賀直哉さんのお宅を一緒に訪ねた時には、「僕の年若い友人です」と紹介してくれました。歓喜しましたね。

瀧井さんは「初心」という言葉が好きでした。初心を忘れずに精進すれば、日記や手紙でも十分文学たりえる。君もやってごらん――。こう言われました。「はがき文学」を目指す大きな手がかりをつかんだ気持ちになりました。



和紙に万年筆で書かれた「初心」の文字。小池さんの宝物のひとつだ

瀧井さんの後押しで本の装丁などに関わり、貴重な体験を積む

装丁したのは、瀧井さんが師事した俳人・河東碧梧桐の「三千里」「続三千里」（講談社）と「現代日本文藝家 筆墨華撰」（大和書房）。「筆墨華撰」は川端康成や井上靖ら瀧井さんを含む著名人15人の筆墨集で、部数限定の豪華本。「三千里」では解説も担当しました。何とか僕を世に出そうとしてくれたんですね。

瀧井さんが和紙に万年筆で書いた「初心」は、僕の宝物です。

06

師(下) 中川一政

心酔、「我を学ぶ者は死す」で決別

僕が師と仰いだもう一人は、洋画家の中川一政さん（1893～1991）です。絵よりも随筆の洒脱な文章に惹かれていました。

東京学芸大学の後輩で友人の清水義光君（79）に中川さんのことを話すと興味を持ち、2人で杉並区永福町の自宅を訪ねました。すぐには入れてもらえず、3時間ほど待っていたら奥さんが「まだいたの？そんなに熱心なら」と、会うことができました。1967年。瀧井孝作さんとの出会いから1年後でした。

独学で道を切り開いた中川さんに心酔した

アトリエがある真鶴町（神奈川県）と永福町に、月1～2回通いましたね。ゴッホやセザンヌの絵を見せてくれました。清水君が話をして僕は聞き役。つまらない質問をするとプイと横を向く。怖かったな。

絵はどうやったら描けますか？――。僕がこう尋ねたら、「よく見ること」「ゆっくり描け」「たった一つを描け」と。そして「はがきに描いてごらん」と言われました。それならできそうだと、僕もその日から絵を描き出しました。その後の「絵手紙」につながっていきます。

中川さんにのめり込み、装丁した単行本から個展のポスターまで集めました。向田邦子さんの「あ・うん」の装丁。あれは素晴らしい。中川さんも気に入っていたね。

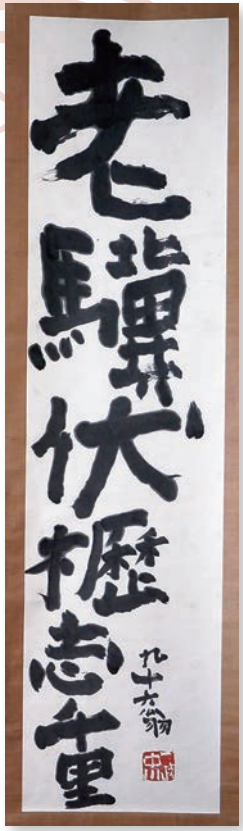
歩き方や話し方まで似てきた僕にある日、中川さんが言いました。「我を学ぶ者は死す」。ハッと我に返りました。このままでは、「亜流・中川」で終わる。12年間学んだ師から離れる決心をしました。

中川さんの死後、オークションで手に入れた書の掛け軸「老驥伏櫪志千里（ろうき れきにふすとも こころざし せんりにあり）」を仕事部屋に飾っている

中川さんは自由奔放ないい字を書くんですよ。清水君と「もっと本格的に書いたらどうですか」と勧めたら書家として燃えたね。7年ぐらいで、銀座で個展を開くんだ。

「老驥……」は最晩年の96歳の作。年老いてもなお高い志をもち続けるたとえで、中川さんの心情がにじみ出ています。「老」の3画目の横棒は途中から書き直しているんです。常識に縛られていない。一日一日を積み上げて、書の「自分新記録」を延ばしていった人。だから晩年ほど字がよくなっているんだね。

僕も80歳になって、やっと芽が出始めたと思っています。



中川さんの書「老驥伏櫪志千里」の掛け軸

※注　連載終了後、中川一政さんとの出会いについて、清水さんから小池さんの妻・恭子さんに「事実と100％違う」との手紙が届きました。清水さんの手紙によると、自分が一人で永福町の中川さんの自宅を訪ねて親しくなり、後日、中川さん宅を訪ねてきた小池さんを、中川さんに紹介したとのことです。ただ、小池さんはすでにお亡くなりになっていますので、小冊子の発行にあたり清水さんから御指摘をいただいた点を付記します。

07

不退転

あえて大学を中退 背水の陣

入学した東京学芸大学は単位不足で4年で卒業できず、留年する

この時に僕は家出騒ぎを起こします。両親の期待を裏切り、いてもたってもいられない。ふと北海道行の列車に飛び乗り、終点だった北見の周辺をさまよいました。下宿からの連絡で松山から上京した両親は泣いていましたね。親不孝でした。

大学5年目からはアパートを借り、生活費を稼ぐために、大学の先輩の紹介で、進学塾の国語講師のアルバイトをしました。中学受験の小学5～6年生を20～30人教え、その後二つの塾を掛け持ちしました。

大学にはほとんど行かない代わり、他の大学で「もぐり聴講」しました。法政、早稲田、中央……。各大学の生協で買った校章を襟元（えりもと）に付けて授業を受けました。一度もバレませんでしたよ。特に、明治は作家・舟橋聖一や文芸評論家・中村光夫、唐木順三ら教授陣がそろっていて魅力的でしたね。ひとかどの人物から生き方を学ぼうと必死でした。

結局、大学8年目に2単位を残して中退する

このまま大学にいても書道家として一流にはなれない。卒業して教員になれば安全な道を歩むことになる。退路を断ちたかった。両親には手紙で知らせましたが、落胆して泣いている姿が目に浮かびました。

中退後、僕が26歳の時に大学の後輩で1歳下の芙美子と結婚しました。芙美子はすでに、都立高校で書道の講師をしていました。

25歳の時の初個展の案内はがき。絵手紙ではなく、棟方志功の影響が強い木版展だった

親友の正岡千年（せんねん）さんに手紙を書き続ける一方、「わしゃあ、女房が勤めている間にこんなことをしていてええんじゃろうか」と尋ねた

そしたら、正岡が「お前は詐欺や泥棒をしている訳じゃない。手紙で人を元気づけている。だから、やれ」と。24歳ごろからは、俑（よう）（人や動物をかたどった古代中国の墓の副葬品）の線描画を添えた「絵入りの手紙」もかき始めていたけど、まだ僕の個性は打ち立てていなかった。

キャッチャーは正岡1人でも、講演などで聴いた話を伝えたいと、書くことで救われた。「お前の失敗作にこそ飾らぬものが出る」。こう励ましてくれた。絵手紙のモットー「ヘタでいい、ヘタがいい」の底流になる。助言はいつも鋭く的確。正岡は僕の「羅針盤」なのです。

08

転機

「銀花」の6万枚と格闘

1977年、東京・銀座の画廊での2回目の個展を開く。季刊「銀花」の編集長・細井冨貴子さんが見に来たことでチャンスをつかむ

この時は、親友の正岡千年（せんねん）にかいた「絵のある手紙」を展示しました。画仙紙に動物などの線画を添えた約50点。細井さんは会場を興奮しながら見て回り、「世の中にこんな手紙を書いている人が今でもいるの？」「すごい」「えらい」と、小柄なのに大きな声で叫んでいました。

その場で、「銀花」の1冊に1枚ずつ肉筆の言葉を添えた私製はがきを挟み込む企画を提案されました。計6万枚という途方もない数で、制作期間は1年間。1日に200枚近く書かないといけないわけです。

妻に相談しました。「あなたならできる」と背中を押してくれた。僕はこれが最後のチャンスだ、と覚悟を決めて5日後、細井さんに「やります」と返事をしました。

77年11月から、狛江市の自宅で絵手紙との格闘が始まる

電動式の墨すり機を使い、朝8時ごろから夕方5時ごろまで濃い墨で画用紙にかいた。鳥や魚などの絵を先に描き、言葉は絵の周りに入れる。「すぐに飛びたちたい」「よし、これからだ！」「芸術はゆさぶりだ」……。インパクトのある短い言葉に凝縮。時には、はがきの枠をはみ出るほど筆文字を走らせました。

1枚終えるごとに、建具職人の義父が作ってくれた200枚入る棚に差し込んでいく。僕の筆には勢いがあるから墨が飛び散る。ジーンズも足の裏も、真っ黒になりました。

小池さんの絵手紙を綴じこんだ「銀花」。勢いのある筆文字に読者の心も踊る

すぐ言葉に行き詰まった

著名人の講演会などで印象に残ったフレーズをたくさん書き留めていた手帳から引用したけど、1週間で言葉が浮かばなくなった。でも、僕の言葉は自分を鼓舞するためのメッセージだと開き直った。何とか乗り切ろうと、必死にひねり出した。

右手が痛み、休ませるために左手で描いたこともありました。今シーズンも絶好調の大谷翔平さんと同じ〝二刀流〟です。

細井さんは僕を励ますために絵手紙を始めてくれた。疲れたり気持ちが折れそうになったりした時に、細井さんの絵手紙が届くと、勇気づけられました。1年後に6万枚を書き上げ、僕の転機になりました。

09

失意と再起

妻の急死でどん底 再婚し気力甦る

季刊「銀花」に挟み込む6万枚の絵手紙をかき終えた日に、妻の芙美子さんが急死する

1978年11月17日でした。夕方、書道講師をしている高校から狛江市の自宅に戻った芙美子は、「頭が痛い」と言っていました。それでも、僕がかき終えたことを伝えると、「あなた、とうとうやったわね」「よかった」とほっとしていた。

その夜、小学3年生の長男と保育園児の長女と家族4人ですき焼き鍋を囲み、お祝いをした2時間ぐらい後でした。芙美子が「頭がズキズキする」と訴え、僕も隣に寝たのですが、息づかいが変で、僕の呼びかけにも反応しない。すぐに救急車を呼び、人工呼吸もしましたが、すでに息が絶えていました。死因はくも膜下出血。36歳でした。

芙美子は6万枚の仕事を喜び、3つの高校の講師を掛け持ちして支えてくれた。でも、僕はよく弱音を吐くんですよ。右手が痛くなってかけなくなった時に「できそうもない」と話すと、「男なんだから、腕の1本ぐらい切ってもやりきらねば」。僕を世に送り出そうと叱咤激励してくれた。だから、こんなうれしい日になぜ？　悔しくてつらくてね。

結婚の翌年、旅行途中の小池さん（右）と芙美子さん＝岡山県倉敷市

ボツになった1万枚を追加でかくことに

子ども2人は高円寺の芙美子の両親に預け、自宅に置いた遺骨のそばで泣きながらかいたな。見守ってくれよ、という気持ちでした。

芙美子は僕と11年連れ添い、手紙書き「前期」の土台を作ってくれた。婦人雑誌の追悼手記でも「これからも、僕は手紙にしがみつき、書き続けるよ」と誓った。でも、失意のどん底。赤坂見附での個展に出す絵手紙がかけたのは、半年間でたった31枚。これが限界でした。

芙美子さんの死から約1年半後。芙美子さんの教え子でもある26歳の恭子さんと再婚する

恭子は、銀座の画廊で開いた一周忌の個展で、1週間受付を手伝ってくれた。個展の帰路に毎日、話をすると意気投合し、僕の書や絵に対する考え方をわかってくれた。聡明で、この人なら茨の道でも子連れの僕と歩いてくれると思った。新たな伴侶を迎えて気力が甦りましたね。以来40年余り。恭子は手紙書き「後期」のいわば「戦友」です。

10

始動

「銀花」機に雑誌の連載、郵便局で教室

6万枚の肉筆の絵手紙を綴じ込んだ季刊「銀花」春号が、1979年2月に発売。「小池邦夫の絵手紙文学」として29ページの特集を組んで紹介される

感激でした。初めて「絵手紙」という言葉が活字になったわけですから。当時はまだ、大きな話題にはならなかったけど、永六輔さんから発売翌日にはがきが届いた。文面は「逢いたかった人に逢えた！」。短い言葉に心をつかまれました。『銀花』は僕にとって、出来事ではなく、事件でした」。約30年後に「銀花」の絵手紙を集めた本には、こんな文章を添えてくれた。うれしかったな。長く交流が続きました。

永さんの推薦で、80年にNHKのバラエティー番組「テレビファソラシド」にゲスト出演し、進行役の永さんに「はがきは僕のステージだ」と話しました。翌年にはNHKの「女性手帳」にも出ましたね。

この頃から、ぽつぽつと仕事の依頼が舞い込み始めます。雑誌に「絵手紙講座」を、月刊タウン誌「銀座百点」にも、著名人に宛てた「絵のある手紙」を連載しました。

81年夏、狛江郵便局で全国初の「親子絵手紙教室」が開かれ、指導にあたる

当時、絵手紙をめぐる話題が新聞に載る機会が増えていました。一方、雑誌「クロワッサン」で僕が「ラクチンに手紙を書こう」と提案し、若い女性らによる「手紙ごっこの会」もできた頃でした。

教室は僕が住む地元の郵便局員から頼まれ、90人に手ほどきしました。初めて筆を持ったような親子が、うれしそうに取り組む姿に感動しました。これをきっかけに毎年、狛江郵便局が教室や講座を開きます。

85年には、東京中央郵便局で「絵手紙のすすめ教室」の講師を務めました。480人の定員を大幅に超える応募があり、3日間連続の開催で合わせて約千人に講演しました。

実は、僕は人前では緊張して本来の絵が描けないんです。だから、実演は妻の恭子や弟子の女性たちに任せました。僕は「集中しろ！」とか号令をかけるだけ。でも、参加した人たちは帰る時にみんな喜々とした表情なんです。もしかしたら、絵手紙は世の中を動かすかもしれないぞ――。期待で胸が膨らみました。

狛江郵便局で開かれた全国初の「親子絵手紙教室」＝1981年夏

11

協会旗揚げ

主婦層の心つかみ、月刊誌も発行

1985年、絵手紙の通信講座を始める。主宰者として初めて「日本絵手紙協会」を名乗った

講座のきっかけは、NHKの朝の情報番組「おはようジャーナル」。杉並区の40代の主婦、尾身七重（おみななえ）さんが、僕宛に毎日絵手紙を出す「三百六十五日絵手紙マラソン」が紹介され、大きな反響を呼びました。

「1年間続けてみたら」と、僕が勧めた。庭の花や台所の野菜など身近なものを描く七重さんの絵は、続けているうちに生き生きとしたものに変わっていったね。全国から「自分もかいてみたい」と番組に問い合わせがあり、講座を設けた。最初の生徒は100人ぐらいかな。

「協会」の名前は思い付きだよ。この名前なら信頼してもらえると思った。毎月23日の「ふみの日」に、絵手紙精神を伝える手書きの「絵手紙通信」を発行。名簿を作って「友の会」も結成し、会員同士が文通して交流する土壌もできた。

「ヘタでいい、ヘタがいい」の合言葉で主婦層の心をつかむ

僕は、自由に見たままの絵を描けばその人独自の味が出る、と言い続けた。手紙に「拝啓」も「草々」もいらない。相手に向けて思った言葉を添えればいい、と。当時のカルチャーブームもあり、中高年の女性たちが反応した。単身赴任の夫に毎日絵手紙をかく人とか、絵手紙が生活の一部になる人たちが急増した。

発行されている「月刊絵手紙」。表紙も毎号多彩で楽しい＝日本絵手紙協会提供

協会を名乗っていたからね、地方からも僕によく講師の依頼が来た。そのたびに地元の愛好者を紹介したよ。全国の公民館や市民大学などの講座で絵手紙教室がどんどん増える一方、講師が中核になって絵手紙運動を進める下地が整っていった。

96年から「月刊絵手紙」を発行。絵手紙人口が急激に伸びる

協会旗揚げから10年たった頃、「小さくてもいいから絵手紙美術館を作りたい」との夢を抱いた。都内で画廊を営む島田幸吉さんに相談したら、「まず機関誌をつくって会員を増やしましょう」と提案された。「絵手紙通信」を充実させて月刊誌にした。創刊号は2千部弱。京橋に最初の事務所も構え、島田さんには初代協会事務局長をお願いした。

あれから27年。絵手紙は主婦層を軸に太い根を張ったね。「月刊絵手紙」は今、約1万1千部。「友の会」会員も1500人近くいます。

12

師友・緒形拳

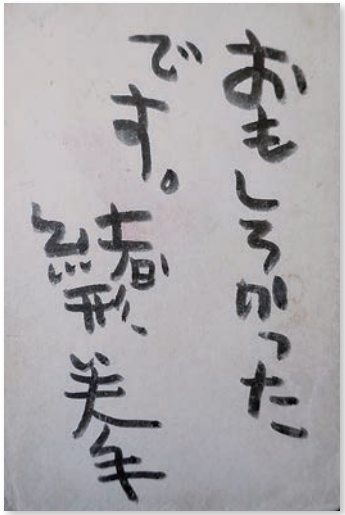
馴れ合わず四半世紀心通わす

多くの著名人と絵手紙を通して交流した。中でも、俳優の緒形拳さん（1937～2008）とは四半世紀にわたって心を通わせた

出会いは83年1月。新宿のビル1階にある通路のギャラリーでした。僕の絵手紙展の作品を食い入るように見つめていました。獲物を狙うハンターの眼でしたよ。

3時間ほどして会場に戻って来て、また真剣に見ていました。声をかけることができなくて、翌日事務所宛に礼状を送ったら、1週間ぐらいして返事が届いた。和紙のはがきに筆ペンで「おもしろかったです」。短くて読みやすい。書はこうあるべきだと、震えるように感動した。

それから交流が始まり、緒形さんからは年に3、4回、はがきや封書が届いた。中国など海外のロケ地から送られた手紙もあります。



緒形拳さんからの最初の返信。心をつかまれた

97年に狛江市の団地から市内の住宅に引っ越したお知らせを送ると、はがきに紙風船の絵とともに大きな力強い字で「転宅のおいわい」。「男の絵手紙」（04年、中央公論新社）に緒形さんの手紙の掲載を依頼して出した手紙の返事は「快諾！緒形拳」。文の短さ、字の大きさ、線の太さ。三つがそろっている。引き込まれましたね。

手紙だけのやりとりが続き、展覧会の会場で顔を合わせても言葉は交わさなかった

手紙書きは相手と会ってはだめ。会うと馴れ、敬意が薄くなる。だから、緒形さんにも電話をかけず、食事を共にしたこともありません。でも、銀座の鳩居堂画廊で毎年開いていた僕の「墨世界展」を緒形さん夫妻が見にきてくれて、一度だけ一緒に写真を撮ったことがあります。

緒形さんが生前、季刊「銀花」の愛読者カードにしたため、編集部に送っていた絵手紙に注目する

ペラペラの愛読者カードからはみ出すような骨太の墨書もあれば、クレパス画も、ワカメをはった作品もある。詩、書、画、篆刻（てんこく）の4本立てがすごい。「紙の土俵」の上で無心で純粋に描いている。僕の監修で約50点が「緒形拳からの手紙」（10年、文化出版局）として出版された。

もらった書のうち、中原中也の詩に顔彩で絵を添えた作品など10点近くを軸装して保存しています。緒形さんは僕の目標でした。

13

海外雄飛

筆墨の故郷・中国で初の交流展

絵手紙が海を渡った。1991年11月、中国・上海の美術館で海外初となる絵手紙交流展が開かれた

とりもってくれたのは、僕の友人で水墨画家の杉谷隆志さん。十年来中国の画家らと民間交流を続けてきた人です。筆墨のふるさとで、「詩書画一体」の絵手紙を通して友好の花を咲かせたい――。こんな熱い思いを込めて、中国側と日本絵手紙協会に提案してくれたのです。

中国には「絵手紙」という言葉はありません。中国語で「手紙」はトイレットペーパー。でも、さすがに文字の国ですね。「画信伝友情」と翻訳されました。

不安はありましたよ。なにせ、現地の様子がまったくわからないんですから。ただ、杉谷さんも僕も向こう見ずだから、ぶつかっていったわけです。絵手紙仲間の奮闘のおかげで、会場には畳大からはがきまで、260枚のパネルに貼られた230人の千数百点が並びました。

500人以上が詰めかけた開会式で、小池さんは「我々は絵手紙の遣唐使です」とあいさつした

階段まで人で埋まってね、すごい盛り上がりだった。オープニングで、太くて赤いテープをはさみでカットしながら実感したね。日本と中国に橋がかかったんだと。会場の通路の空間に、黄色と黒のロール段ボールで川の流れを作るなどの斬新な会場構成も話題になったな。

中国の出品者はプロの水墨画家だけど、こちらは素人の普段着のままの路線を貫いた。「ヘタでいい、ヘタがいい」の精神でね。これが中国人の心にも響いた。一生懸命かいたヘタさ、情熱をぶつけてかいた力強さが伝わったんだね。

開会式であいさつする小池邦夫さん
＝1991年、日本絵手紙協会提供

上海の美術担当の新聞記者が、一晩でかきあげたという30枚の絵手紙の出来栄えにうなった

うち1枚は、絵手紙をかく僕の後ろ姿に徳利と杯を配し、中国語で詩を添えている。〈絵手紙は小さいが、池の蓮の花のようだ。書いてある言葉を読むと、酔う〉

やってくれたなと、心が躍りました。暮らしの中で楽しんで自由に描く「実用の美」が、中国でも受け入れられた手ごたえを感じたね。

5日間の会期中に来場者は2千人を超え、大成功でした。絵手紙は確かに「友情」を伝えたのです。

14

ブーム到来

NHK「趣味悠々」で人気沸騰

NHKの教養番組「趣味悠々」の「心を贈る絵手紙入門」（1998年1月～4月放送、13回）の講師を夫婦で務める

出演依頼がきた時には、うれしかったね。番組も知っていたし、機会があれば出たいと思っていたから。

ただ、僕は人前では緊張するから本来の絵が描けない。だから、担当のディレクターに実技は妻の恭子に任せる条件で引き受けました。

30分の番組で、司会はタレントの清水由貴子さん。「果物を描く」「心に届く言葉」「巻紙にかく」といった各回のテーマに沿って、僕に送られた絵手紙仲間や有名人のはがきなどを紹介しながら、清水さんやゲストとトーク。隣のセットで恭子が清水さんに実技を手ほどきした。

1回目から「ヘタでいい、ヘタがいい」を強調した

実は、この前にNHKの「婦人百科」（92年3月）に出た時に、今回とは別のディレクターから「ヘタでいい、とは絶対に言わないで」と釘を刺されていた。でも、本番では夢中になって、ぽろっと言ってしまった。これが逆に受けた。以後3回にわたって出演することになると、ディレクターが豹変して「ヘタでいい、とぜひ言って」。だから、今回は堂々と僕のモットーを訴えた。

清水さんは本気で絵手紙に取り組み、伸び伸びとかき続けてくれた。スタジオの収録で、僕は絵筆を握る清水さんの隣で「いい色だ」とか、「その調子。筆が紙の上で小躍りしているね」とか励ました。回を重ねるごとに、清水さんの絵は大きくなり線は力強くなっていったね。

絵手紙の命は線にあります。筆は心の中を演奏する楽器です。心を込めてかけば、つたなくても見る人の心を動かす――。番組を通して絵手紙の根幹は伝わったと思います。

番組は放送途中から大きな反響を呼んだ

NHKには問い合わせが殺到し、僕も恭子も見知らぬ人から「毎週見てますよ」と声をかけられるようになった。翌年には、異例の再放送があり、テキストは50万部のベストセラーに。番組は僕のやりたいことをやりたいようにやらしてくれた。絵手紙ブームに火が付くかも、という始まる前の期待は、現実のものになりました。

「趣味悠々」の台本と、ベストセラーになったテキスト（中央）

15

美術館誕生

富士山の「気」を浴び手書き文化発信

2004年7月、富士山の麓にある山梨県忍野村に「小池邦夫絵手紙美術館」が開館した

尽力してくれたのは画商の中川新司さん。百貨店での美術展企画・運営に携わっていた人です。1994年に出会い、全国各地のデパートで僕の絵手紙展を開いてくれた。

鼻が利くのかな。次の時代を担う美術分野として絵手紙に目を付けたんだね。97年には、朝日新聞社に持ち掛け、当時の東急日本橋店で「小池邦夫の絵手紙展」を開催。6日間で約1万4千人も来てくれた。

美術館がほしい――。僕の夢を聞いた中川さんは人脈を生かして忍野村に構想を持ち掛け、3年がかりで完成にこぎつけた。自分の名前を冠した公設の美術館だから、うれしさは格別ですよ。場所は四季の杜おしの公園内で、建物は「岡田紅陽写真美術館」と併設。生涯をかけて富士山を撮り続けた有名な写真家と並ぶなんて願ってもないことだよね。

20代～60代の絵手紙約370点を中心に展示している

環境がとてもいいね。美術館周辺の赤松林の香りがたまらない。企画展示ホールから真正面に見える富士山からは「気」が伝わる。元気になってくるんだ。それに、村の代名詞ともいえる忍野八海の湧き水。水がいいと墨の色もさえる。忍野の水は清らか。だから好きなんです。

小池邦夫絵手紙美術館のシンボル「絵手紙富士」＝山梨県忍野村

一般展示室のシンボルが「絵手紙富士」です。親友の正岡千年にかいた初期のはがき227点が、富士山の形に積み上げられています。あふれる思いを千年の真ん中に命中させようと必死だったな。でたらめともいえるけど、隠されている僕の魂のいろんな要素が、富士山の裾野のように広がっている気がする。

年間5千～6千人が入場している

特別展示室には僕のコレクションが飾られている。特に、漢代の「瓦当」（軒瓦の先端を文様や文字でデザインした部分）のコーナーが一番好き。線がいい。心に真っすぐ届いてくる。常にそばに置いて眺め、「気」の高ぶりを感じ筆をとってきた。

美術館ができたことで、「ヘタでいい」という絵手紙の考え方が認知された。これがうれしい。ぜひ出かけてほしい。富士山が両手を大きく広げて迎えてくれます。

16

東日本大震災

魂を揺さぶられた被災地との交流

東日本大震災が起きた2011年3月11日の4日後、被災地の通信講座の受講生らに絵手紙を送った

津波被害の甚大さにうろたえながら、福島、宮城、岩手の19人に出した。届くかどうかわからないけど、巻紙で一人ひとりに呼びかけた。

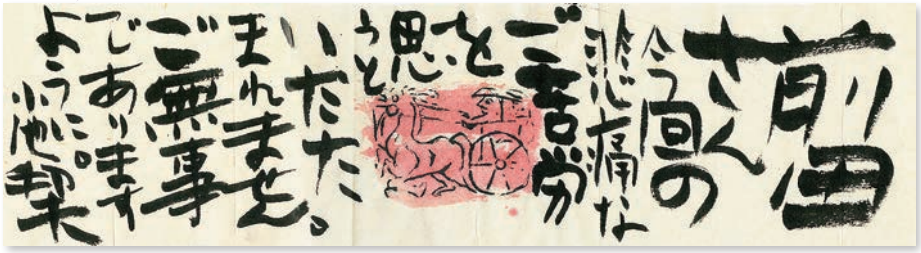
次々に返信が届いた。ローソクの絵を添え、「一昨日までローソクの灯りで暮らしました……はげましのおことばに勇気百倍です」。太い筆文字で「元気です」や「生きてまーす」とのはがきも。

驚いたね。暗い文面を予想していたけど、未曽有の大惨事に打ちのめされながらも前向きに生きる力強さにあふれている。今回のように魂が揺さぶられた絵手紙は初めてだったな。絵手紙は人の生きる支えにもなると感じた。だから僕はもっとかきたくなった。

絵手紙友の会の名簿を基に5月初めまでに295通を送り、宮城県石巻市の教室も訪問した

200通の返信があった。返信の手紙にこれほど幸せを感じたことはなかったね。一つひとつがみんないい。極限状態の中で絞り出された言葉や絵が僕の心を射抜いた。

石巻を訪ねたのは、教室をやっている人から、生徒たちがみんな元気がない、との手紙をもらったから。集会所に14人の女性が来ていた。



小池さんが宮城県名取市の前田利子さんへ送った絵手紙＝日本絵手紙協会提供

最初は表情も堅くて話は弾まなかった。最後に、用意してきた5センチ前後の大きさの俑（人や動物をかたどった古代中国の副葬品）を見せた。龍、犬、蛙……。みんな笑みを浮かべ、触りながら「絵を描いてもいいですか」。こんなちっぽけなものに、人の心をほぐす力が秘められている。僕が好きな「古拙」に通じるね。

手紙の交流を11年7月、「東日本大震災 被災地との絵手紙」（中央公論新社）として出版した

被災地で苦しんでいる人たちが、絵手紙で裸の自分をさらし、元気を取り戻していく。手でかくことで人の心に灯りがともるんだ――。絵手紙の底力を再認識しました。

震災後、僕はよくこう手紙にかきます。「一杯の水で生き返るように一通の手紙で生き返る」と。

17

発祥の地

狛江をまるごと手書きの美術館に

狛江市を絵手紙発祥の地としてPRする事業が始まり、2008年春、狛江駅前に小池さんが原画を描いた横断幕やフラッグが登場する

「発祥の地」は僕が1981年、狛江郵便局で全国初の絵手紙教室を開いたのが由来。それにちなみ、市が絵手紙で狛江を発信する計画を、担当課長から聞いた。もろ手を挙げて賛成し、全面的に協力したよ。

盛り上げてくれたのは市外の絵手紙仲間だった。僕は最初、恥ずかしくて駅前に見に行けなかった。でも、僕の自宅や市長宛に、横断幕やフラッグの絵を添えた激励の絵手紙が続々と届いた。「設置おめでとう」「応援します」――。スケッチのためにわざわざ狛江に足を運んでくれたんだ。予想外の反響だったな。

当時、絵手紙人気は全国的に高まっていたけど、市民の間ではいまひとつだった。むしろこの事業を皮切りに、「絵手紙」が徐々に市民にも認知されていった気がする。

狛江駅前に10年、巨大絵手紙（縦4メートル、横3メートル）が設置され、20年には2代目がお目見えした

両方とも市の依頼でかいた。実をいうと、僕は注文の仕事は得意じゃない。自分の好きなものをかきたいようにかいてこそ相手の心に響くからね。それで、1作目は僕の好きな俑（よう）の騎馬姿の女性を描き、「動かなければ出会えない」と呼びかけた。

狛江駅前にある地下駐車場の排気塔の壁面に掲げられている巨大絵手紙

でも、2作目は苦労したな。市制施行50周年記念だったので、狛江のシンボル・多摩川をはじめ、五本松や翼を広げる白鷺に富士山を描いたけど、僕は写実的な風景画は苦手。妻・恭子のアドバイスで2、3回かき直してようやく仕上げた。

20年からは、市内全域を美術館に見立てて絵手紙を展示する「まるごと美術館」事業も進んでいる

きっかけは、僕が松原俊雄市長に贈ったたくさんの絵手紙。市長が音頭を取り、市民に公開して楽しんでもらおうと、市役所のギャラリーや地域センター、郵便局、駅などの公共施設16カ所に展示してくれた。

僕の絵手紙のマンホール（15カ所）やロードシート（50カ所）も作ってくれた。街中に散りばめられて目にする方が、絵手紙の味が出る。全国で2番目に面積が小さい市だから絵手紙に注目してくれたし、「まるごと美術館」も生かせるんだね。

18

記念日制定

「ふみ」と読む2月3日に「福」配り

2月3日が「絵手紙の日」になり、2010年の初の記念日に狛江市で制定セレモニーがあった

記念日は、日本絵手紙協会の会員たちが以前から切望していた。2月3日にしたのは、「ふみ」と読む語呂合わせからだね。

この日は節分だから、「豆の代わりに絵手紙で福を配るのはどうだろう」と僕が提案した。それで絵手紙協会が日本記念日協会に申請して、2009年8月に登録されたんだ。

セレモニーは盛り上がったな。会場の狛江エコルマホールには、全国から絵手紙仲間が700人以上も駆けつけてくれた。僕は一日郵便局長として江戸時代の飛脚姿で舞台に登場した。菅笠に草鞋履きでね。人見知りで引っ込み思案のくせに、目立つことが結構好きなんだよ。

投函セレモニーで仲間たちが、持参した絵手紙を両手で掲げ、満席の会場を「はがきの花」で埋めた。あの光景は忘れられないな。

制定セレモニーで江戸時代の飛脚姿で登場した小池邦夫さん＝日本絵手紙協会提供

会場では小池さんの講演会や、「絵手紙50年展」も開かれた

僕は19歳から親友の正岡千年に手紙を書き、2010年で半世紀。この間千年宛に3万通も出した。千年がいるから書けた。行き詰まっているとヒントをくれた。千年という名キャッチャーがいるから全力投球できた。だから、僕は講演会で「絵手紙にはキャッチャーが大事」と話した。

僕の手元に、額装した自分の絵手紙がある。好きな黒陶俑の絵を描き、こうつづった。「明日が楽しみ50年そう思ってかいてきた」。銀座の鳩居堂で毎年開いてきた個展でも非売品にして、大切に保管してきた。絵手紙を始めて60年以上たつけど、思いは今も同じだよ。

狛江市制施行50周年の2020年、映画監督の木村大作さんとともに、初の名誉市民に選ばれた

想像もしていなかったからね。最初に市の秘書広報室長から打診を受けた時にも、「僕でいいの？」と何度も尋ねたよ。それに、木村さんは国内外で高い評価を受けているけど、僕は「手紙書き」を好き勝手に続けてきただけだからね。

でも、うれしかったから、翌年の正月、松原俊雄市長に年賀の手紙を送った。干支の牛に自分を例えた絵を添えて書いた。「よくぞワガママな牛を選んでくれました」とね。

19

松山と狛江

古里の書家顕彰　心癒す多摩川

故郷の愛媛県松山市と、もう約半世紀住んでいる狛江市。どちらも一時期は嫌いだった

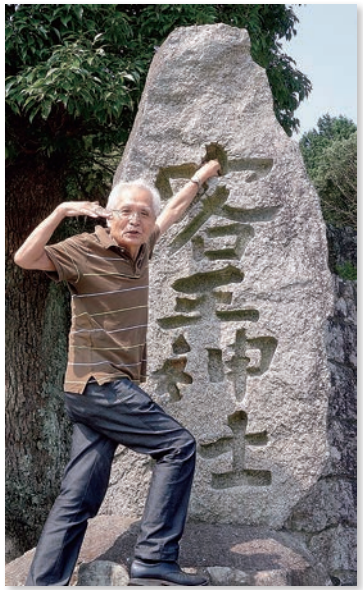
松山人は温和でおっとりしている。40代までその「ゆるさ」が嫌だった。手紙書きの僕にとって書は一発勝負。闘いです。松山に帰ったらゆるんで闘えないと思っていた。

転機は50代。元々僕が書家を志したのは、小学生の時に地元の書家・三輪田米山（みわだべいざん）の石文（いしぶみ）（碑）に出合ったから。力のこもった書に心をつかまれた。それから約40年。筆一本で立ち、ようやく米山の掛け軸などが買えるようになり顕彰活動を始めた。

松山周辺には米山の石文が80基余り建っている。神社の幟（のぼり）や碑巡りをしたり、旧家を訪ねて米山の襖の書や掛け軸を見せてもらったりしているうちに、古里との距離がどんどん縮まっていきました。

２００６年、僕の呼びかけに応え松山の絵手紙仲間で12人の女性が、米山作品の発掘と石文の拓本採りに立ち上がってくれた。「マドンナチーム」と名乗り、12年までに30カ所近い神社などで拓本を採った。米山の字の彫りは10センチもある。拓本は肉筆に迫る。よくやってくれたな。

08年に僕は、ＮＨＫの新日曜美術館「没後１００年三輪田米山の世界」に出演。米山の魅力を伝え、米山の書を「次の世代に引き継いでほしい」と訴えた。松山周辺でしか知られていない書家が、この番組で全国区になった。今も、松山に帰ると米山を見たくなるね。



故郷の松山で、米山の石文を説明する小池邦夫さん　＝郵研社提供

狛江市が好きになったわけは、地域の人情と多摩川だった

狛江に引っ越したのは１９７４年。多摩川に近い団地の1階です。街の田舎っぽい雰囲気が、好きになれなかったな。でも、近所の商店街の人たちと接しているうちに、変わってきた。自転車屋、文房具店、印刷所……。店のご主人たちの素朴な人情に触れているうちに、僕のかたくなな心がほぐれていった。

多摩川には癒されてきた。進学塾の講師のアルバイトをしていた頃は、多摩川の土手を歩いて小田急線の登戸駅まで行った。水面からコイやフナがはね、バッタやトンボがいた。季刊「銀花」に6万枚の絵手紙をかいた時には、疲れると多摩川のヨシ原に寝転んで空を眺めたな。多摩川はずっと僕の「庭」です。

20

上武大学（上）

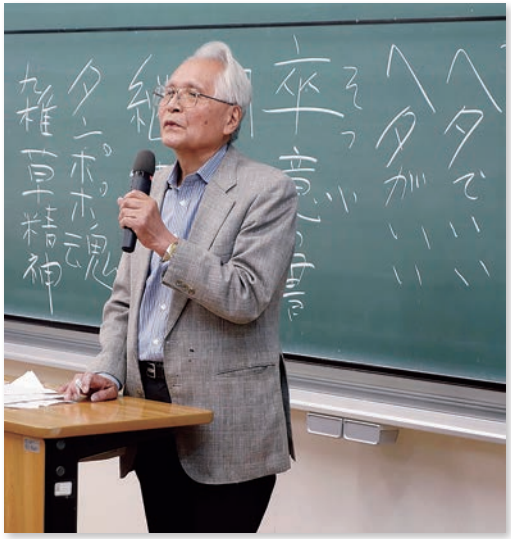
授業で〝種まき〟若者の裾野広げる

2009年4月、群馬県の上武大学が看護学部の授業に絵手紙を導入。小池さんはこの年の12月、客員教授に就任する

導入したのは理事長の澁谷朋子さん。1993年から僕の通信講座を受講して、絵手紙で心を通わせてきた愛弟子の一人です。

大学の授業に絵手紙を取り入れた時には驚いたね。僕は若い人は絵手紙に興味を持たないし、授業で教えるのはどうかな、と。長続きしないんじゃないか、と感じていた。

だから、客員教授の話があった時にも生返事をした。ただ、僕は大学中退だから大学教授への憧れもあった。



特別講義の教壇に立つ小池邦夫さん＝郵研社提供

それに大学建学の精神「雑草精神（あらくさだましい）」に心が動いた。絵手紙のモットー「ヘタでいい」と通じるからね。それで引き受けることにした。

絵手紙授業は12年から全学部で開講。人気講義となり、受講生は17年に345人まで増える

15回の授業は澁谷さんが自ら担当し、僕は「特別講義」として1回受け持った。

今の大学生は私語が多いとかスマホばかり見ているとか、言われているけど、僕の授業は逆にシーンとしていて反応がなかったんだ。話が伝わっていないな、とがっかりしていたら、意外にも学生たちの心に響いていたことがわかった。

なぜ、わかるかというとね、書いたはがきからなんだ。授業は澁谷さんの発案で、はがきの表の半分下に200字の文章を書かせている。裏に描いた絵や言葉についてなどがテーマで、その中に「絵手紙というものは、人の表れだと思う」とか、「筆一本で相手に伝える声となる」なんて書いてくる。心の内から湧き出てきた言葉に打たれた。

学生と粘り強く向き合ってきた澁谷さんのお陰で、感受性や表現力が豊かになり、僕の手が届かなかった若者たちに絵手紙の裾野が広がった。僕も〝種まき〟のお手伝いができてうれしいね。

絵手紙は硬式野球部を皮切りに運動部にも広がる

野球部の谷口英規監督が、絵手紙で大切な集中力を身につけてもらおうと、部員に勧めたと聞きました。その後、陸上や駅伝、サッカー部などでも取り組み、運動と文化が一つになっている。「文武両道」を若者たちが証明しようとしているね。

21

上武大学（下）

公開講座でがんとの闘病告白

小池さんの手がき文字「上武大学」は、学内の競技施設や最寄り駅の広告などにも使われている

「上武大学」の文字は、学内のあちこちにあるんだ。大学案内のパンフレット、伊勢崎キャンパス正門のプレート、送迎バス、サッカーグラウンドにテニスコート……。理事長の澁谷朋子さんから頼まれて、アリーナの「定礎」のプレートや硬式野球部の看板なども書いたね。大学が、ちょっとした僕の〝ギャラリー〟のようになっている。

JR高崎駅の構内や新町駅ホームの看板、高崎市内を走る国道17号の特大広告にまで、僕の「上武大学」が大書されている。さすがに大学の外にまであると恥ずかしいな。

2022年秋、大学で小池さんが講師を務めた絵手紙公開講座の模様や絵手紙の軌跡などを紹介する本が大学から出版される

題名は「まるごと絵手紙 まるごと小池邦夫・in JOBU」。澁谷さんが編集してこんな本まで出してくれた。掲載した公開講座は14年から、大学の学園祭「雑草祭」などに合わせて開講。僕が大きな影響を受けた棟方志功さんや熊谷守一さんら5人をテーマに6回にわたって話した。

僕が子どもの頃、心をつかまれた故郷・松山市の書家、三輪田米山の時には、学生ホールの天井から長さ8メートルの米山の幟6本を掲げた。奔放自在な書の迫力にみんなびっくりしていたね。幟は大学にプレゼントして今もホールに飾られています。

「まるごと」の出版を記念して開かれた22年10月の公開講座で、がんとの闘病中だと公表する

澁谷さんや妻の恭子らを加えた4人によるトークショーで、僕は開口一番「実は今、がんと闘っているんです」と告白しました。

20年7月に胃がんが見つかり、抗がん剤治療を受けてきた。僕の仕事場は狛江市の団地の4階。でも、エレベーターがないから手すりにつかまり、途中の階で休みながらたどり着く。しんどいはずなのに、書くと面白い。テンションが上がる。「正念場ってこれか」と思った。

「まるごと」には、僕が81歳を目前に「正念場」と大きく書いて澁谷さんに送った手紙が載っています。「フーフー荒い息になるけど心地いい。歓びが満ちてくる」と。

闘病中に「正念場」とつづり、澁谷朋子理事長に送った手紙

22

武者小路実篤

迷った時に立ち戻る〝心の師〟

僕が最も影響を受けた人は、実は小説家の武者小路実篤さん（1885～1976）なんです。生涯の「心の師」といえます。

高校の書道の教科書に武者小路さんの書が載っており、教科書の手本とは全く違う字に惹かれた

東京学芸大学書道科に進んだけど臨書の授業にうんざりしていた。国会図書館に通い武者小路さんの本を片っ端から読破した。500冊ぐらいかな。作品はわかりやすい言葉で書いてあり、希望を与えてくれる。元気が出る。小説に出てくる好きな言葉をノートにメモしたよ。

僕が絵を描けるようになったのは、この時に手にした本のお陰なんです。「畫（え）をかく喜び」（57年発行）。40歳すぎから絵を描き始めた武者小路さんが、71歳の時に出版した。僕と同じように、絵が苦手だったことに勇気づけられたね。

ポイントは写生。武者小路さんは馬鈴薯（ばれいしょ）を何度も何度も写生した。

「目の前にある物を、毎日根気よく、くりかえしくりかえし、かいている」「一つのものの写生がほんとうにできれば、どんなものでも、かこうと思えば、かける」――。こうしたヒントをもらい、どんなに励まされたかわからないよ。

身近なものを見たままに描く。それに、誰にでも読める字で、「仲よき事は美しき哉（かな）」とか明るく元気づける言葉を添えている。そうか、こうやればいいのか！絵と文が響き合う絵手紙につながった。

武者小路像。「吾作」は小池さんのペンネーム

「まだだ まだだ 今に 今に」と希望を持ち続けた武者小路さんの向上心に触発されてきた

武者小路さんは90歳まで50年間、無心に筆を握った。描かなかったのは病気で寝込んだ時などだけ。僕も、元日から1日も休まず仕事場に出かけ、手紙書きを続けてきました。

武者小路さんを「あのカボチャのおじいちゃんか」と日曜画家のようにみる人がいるけど、間違いだと思う。だって、日本を代表する画家の梅原龍三郎さんも、武者小路さんの絵をほめているんですよ。特に、墨の色は年を重ねるほど輝きを増している。毎日、鍬（くわ）で土を掘るように自分を掘っていったからだろうね。

僕は行き詰まったり迷ったりした時には、武者小路さんに戻る。画集を見たり模写したりしています。

23

夫婦愛

妻へ送った2万枚の〝ラブレター〟

2002年夏から、妻・恭子さん宛に毎日欠かさず絵手紙をかくようになった

僕が61歳の時、軽い脳梗塞で入院したことがきっかけ。通信講座の生徒からの絵手紙を病床で読んでいたら、家族には出したことがなかったな、と恭子の姿が頭に浮かんだ。

退院後、恭子に送った最初の絵手紙は7月7日付。画仙紙に鯉の絵を大きく描いた。鯉が好きなんですよ。だって僕は「コイケ」だから（笑）。

絵手紙は今日の命の「溢（あふ）れがき」。書も絵も「一発一気一息でやってのけたい」とひたすらかき続けた。

結婚記念日や誕生日などには、恭子にねぎらいの手紙も送りました。母の日には「食事も原稿も何もかも……365日ご苦労さま」。大みそかには「もう一度、今年も有難う」。

絵手紙は封筒に5、6枚、平均すると3枚を入れ、帰宅前に自宅のポストに投函。翌朝、恭子が受け取る日々でした。

18年間続けてきた恭子さんへの絵手紙の筆が止まる

2020年7月に胃がんが見つかって入院。個室に筆や硯（すずり）などを持ち込んで最初の10日間はかいていたんです。でも、抗がん剤治療で筆を持つのがつらくなってね。

当時は新型コロナウイルスの感染防止のため、面会謝絶。不安が増す中、恭子が僕を励まそうと絵手紙を送ってくれた。季節の桃や自宅近くの公園の池で見つけた蓮の花の絵が描かれていた。やさしさにグッときたね。3週間後に退院。再び仕事場に通えるようになりました。

絵手紙は夫婦円満の秘訣

恭子からの返事はほとんどない。その代わり、気に入った絵手紙を自宅のあちこちの壁に飾ったり、「これ、よかったね」と言ってくれたり。ごくたまに、ファクスで感想を送ってくれたこともあったな。

恭子には頼りっぱなしです。闘病を支えてくれるだけでなく、取材依頼への対応、講演会で何を話すか、何を着ていくか……。何かにつけて相談してきました。ケンカをした時も、僕が絵手紙で謝ります。

恭子への絵手紙は僕の体調悪化で23年1月19日付が最後に。約20年間で2万枚以上になった手紙の山は、恭子という受け手がいたからこそ続いた〝ラブレター〟だったんだね。

小池さんが恭子さんへ送った絵手紙。
感謝の気持ちをストレートに表している

24

これからだ！

狛江から世界へ 夢広げる

狛江市の団地の仕事場には、1990年ごろから30年余り通った

実はね、この前に調布市国領町に部屋を借りていた。俳優でタレントの高田純次さんの実家の2階だったんだよ。高田さんとは、テレビ朝日の番組「じゅん散歩」（2016年10月放送）で初めてお会いしました。僕と手紙のやりとりをしていたことなどを披露して話が弾んだね。

団地の仕事場は、山積みになった棟方志功や中川一政、熊谷守一などの画集に占領されて、足の踏み場もないほどだったな。大きな硯（すずり）や彩墨、筆が散らばり、机の周りには俑（よう）が転がっていた。雑然としていたね。

講演会後の交流会でファンの声援に応える小池さん＝2023年３月

俑を触ったり画集を見たりしているうちに、心が躍ってくる。内側から書きたい線や色がわき上がってくるんだ。がんの闘病中も、仕事場に行ける幸せを感じた。23年の2月を最後に通えなくなったけど、自宅で体調がいい日には筆を持ったよ。

23年3月、狛江エコルマホールで「狛江で育った絵手紙」をテーマに小池さんの講演会が開かれた

妻・恭子のサポートで、車いすで登壇した。会場を見渡したら600人近い絵手紙愛好者が席を埋めている。久しぶりに胸が高鳴ったね。

講演では、調布市武者小路実篤記念館・首席学芸員の伊藤陽子さんと、僕が最も影響を受けた実篤さんの書画の魅力について対談した。

この日は、第5回ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）で日本代表「侍ジャパン」が世界一奪還を果たした直後。僕は最後に叫びました。「こんなちっぽけな絵手紙でも、ずっと積み上げて重なってくると、世界一だって夢じゃない」。「狛江から世界へ」と。

講演会後の交流会に小池さんが再び登場。拍手や声援の渦に、恭子さんは「81歳のアイドルです」。

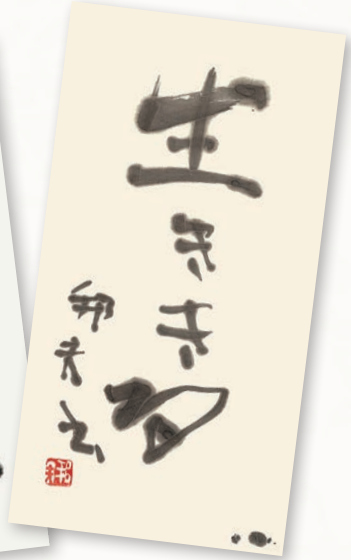
僕の通信講座を受けて公認講師になった人たちが、全国から大勢来て手を振ってくれた。感激したね。

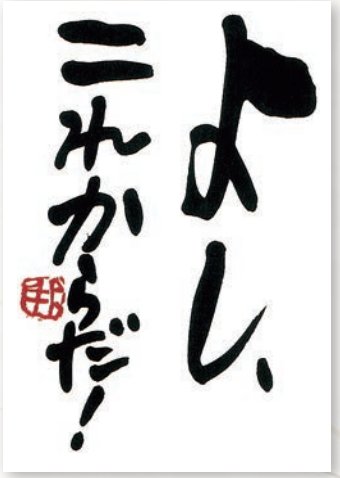
僕は、尊敬する実篤さんや熊谷さん、中川さんたちが90代まで長生きして、最晩年にとてもいい仕事をしていることを励みにしてきた。

客席から「まだまだ、これからだ！」の激励の声が飛び、僕は腕を振り上げてこたえました。

「本当に、これから！」

小池邦夫 作品集





あとがき

「1冊にまとまるとうれしいね」

小池邦夫さんは「広報こまえ」での連載開始直後から、冊子になる楽しみを口にしていました。でも、昨年8月31日、連載途中で帰らぬ人に。小冊子の発行にあたり、真っ先に手にとってほしい人に読んでもらえない寂しさを改めて感じています。

私は、新聞記者時代に絵手紙の取材を通して小池さんと知り合いました。

最初に書いた記事は2008年5月でした。狛江市が、「絵手紙発祥の地」PR作戦として狛江駅前に横断幕やフラッグなどを設置。全国の絵手紙ファンから激励や祝福の絵手紙が殺到し、反響を呼んでいるという明るい話題でした。図案を描いた「絵手紙の創始者」と市役所で初めてお目にかかりました。

「ヘタでいい、ヘタがいい」。一人ひとりがもつ「自分らしさ」を「ヘタ」に置き換えたこの合言葉で絵手紙の魅力を発信する小池さんの誠実で温かい人柄に魅了されました。以来、転勤するまでの約3年の間、絵手紙をめぐる様々な活動を紙面で紹介、普及運動を応援しました。

再会したのは2022年。新聞社を退職し、「広報こまえ」で連載した「多摩川慕情　狛江の四季」の取材でした。狛江駅前に掲げられた小池さんの巨大絵手紙をめぐる話を聞くため、11年ぶりに多摩川に近い狛江市の団地の仕事部屋を訪ねました。前年、がんの摘出手術を受け、抗がん剤による治療中だと知りました。そのせいで痩せ、体力も弱っているようでしたが、絵手紙へのほとばしるような情熱は全く衰えていませんでした。傘寿を超えても気力は充実していました。

再会を機に、「多摩川慕情」に続く企画として小池さんの半生をたどる連載が心に浮かびました。

「絵手紙はかき方ではない　生き方だ」。小池さんが好む言葉の一つです。身をよじるようにして「絵手紙」という独自の世界を切り開き、全国に広めた歩みを紹介することで、生き方のヒントにつながるものがあるのでは――。こんな気持ちから、狛江市に企画を持ち掛け、連載が実現しました。

毎回のインタビューで驚いたのは、常に高みを目指すストイックな姿勢でした。「七十五、六歳から八十五、六歳までが一番伸びる時だ」。小池さんは、医学者で京都大学総長を務めた平沢興（こう）さんの言葉に強く惹かれていました。師と仰ぐ瀧井孝作さん、中川一政さん、武者小路実篤さんらが最晩年に優れた書画を残していることに触発されていたからです。小池さんの妻・恭子さんからは、闘病中も実篤さんや熊谷守一さんらの画集を見ながら模写を繰り返していたと聞きました。

80歳の時に小池さんが巻紙にかいた作品があります（52・53Pの作品集参照）。俑（よう）（人や動物をかたどった古代中国の副葬品）の犬の絵とともに、「書が面白い　あと十年やれたら独自が出そう」。あの誰にもまねのできないダイナミックな文字で綴っています。

「手紙書き」としての覚悟と矜持。「よし　これからだ！」と自身を励ましながら、絵手紙を芸術にまで高めるために命を燃やし尽くしました。

大好きだった夏の終わりに天に飛び立った小池さんの一周忌に合わせ、この小冊子は出来上がりました。今頃は空の上で読み返しながら、「明日よりは今、今、今」と筆を走らせているに違いありません。

2024年夏　元新聞記者　佐藤　清孝

小池邦夫 年譜

1941年		愛媛県松山市に生まれる。
1960年	18歳	東京学芸大学書道科に入学。
1961年	19歳	中学時代からの友人・正岡千年に宛て手紙を書きはじめる。
1966年	25歳	作家・瀧井孝作と出会う。以降瀧井が鬼籍に入るまで師事。
1967年	26歳	画家・中川一政と出会う。以降、10年間師事し書画一致を学ぶ。
1973年	32歳	瀧井の推薦で河東碧梧桐の『三千里』と『続三千里』（講談社）の装丁と解説文を書く。
1975年	34歳	文芸春秋画廊にて初の個展を開催。
1978年	37歳	季刊『銀花』（文化出版局）の企画で絵手紙6万枚をかく。
1979年	38歳	妻・芙美子が急逝。
		永六輔との絵手紙交流始まる。
1980年	38歳	奥田恭子と結婚する。
		東京中央郵便局で1200人に「絵手紙のすすめ教室」を開催するなど、積極的な絵手紙普及運動を展開。
1985年	44歳	絵手紙愛好者の全国組織「日本絵手紙協会」創設、会長になる。
		俳優・緒形拳と絵手紙交流始まる。
1989年	48歳	手紙の普及拡大の功労に対し、郵政大臣から表彰を受ける。
1991年	50歳	中国上海市対外文化交流協会の招きで、上海美術館で「画信伝友情展」を開催。
1992年	51歳	NHKテレビ「婦人百科」にゲスト出演（反響が大きく、以降3回にわたり出演）。
1994年	53歳	俳優・片岡鶴太郎、歌手・菅原都々子との絵手紙交流。
1996年	55歳	『月刊絵手紙』創刊。
1998年	57歳	NHKテレビ「趣味悠々」に夫婦で出演、反響を呼ぶ。
1999年	58歳	歌手・長渕剛と絵手紙交流。
2001年	60歳	中学道徳教科書（光村図書）に絵手紙のすすめが掲載される。

2004年	63歳	郵便の父・前島密賞受賞。 山梨県南都留郡忍野村に「小池邦夫絵手紙美術館」開館。
2005年	64歳	絵手紙発祥の地―狛江23周年記念講演会開催、絵手紙メモリアルポスト設置。
2006年	65歳	陝西省歴史博物館（中国西安市）で「日中絵手紙展」開催。
2007年	66歳	共同通信「晴耕雨読」の挿絵を一年描く。
2009年	68歳	創刊40周年の季刊『銀花』157号（文化出版）に70ページの特集が組まれる。 群馬県・上武大学の客員教授に就任。 絵手紙の日（2月3日）を制定。
2010年	69歳	「絵手紙50年展.in狛江」を開催。 上武大学公開講座開催（以後、毎年開催）。
2011年	70歳	東日本大震災復興支援「絵手紙チャリティー講演会」開催（狛江）

2012年	71歳	上武大学の「美術」に導入した絵手紙の授業は大学全部で開講、人気講座に。
2013年	72歳	東日本大震災への支援に対する感謝の絵手紙展「謝謝台湾」に寄せて、文化大学（台湾・台北）に絵手紙を寄贈。
2014年	73歳	上武大学「手がき文化研究所」所長に就任。 日本絵手紙協会名誉会長に就任。
2015年	74歳	『小池邦夫のことば集―ずっと手紙を書いてきた』（日本絵手紙協会）出版。
2017年	76歳	上武大学の第2回絵手紙パリ研修で、特別講師として参加。
2020年	79歳	東京都狛江市初の名誉市民に選ばれる。
2021年	80歳	第69回愛媛新聞賞（文化部門）受賞。 文化庁長官表彰を受ける。
2022年	81歳	松山市文化スポーツ栄誉賞受賞。
2023年	82歳	8月31日、狛江市の自宅にて永眠。

小池邦夫さん愛用の道具

聞き手・執筆者：佐藤　清孝（さとう・きよたか）

1953年福島県いわき市生まれ。1981年朝日新聞社入社。武蔵野支局勤務だった2008年に、狛江市の「絵手紙発祥の地」の事業推進がきっかけで小池邦夫さんと出会う。2021年春に退職。
2022年10月から「広報こまえ」で「多摩川慕情　狛江の四季」や「小池邦夫のうちあけ話」の連載記事を執筆。

本書は、「広報こまえ」の連載（令和５年４月1日号～令和６年３月15日号）をまとめ、加筆・修正しました。
登場する人物の年齢・肩書きなどは掲載当時のものです。

小池邦夫のうちあけ話

発 行 日　令和６年８月31日
発　　行　狛江市
編　　集　狛江市企画財政部秘書広報室
〒201-8585
東京都狛江市和泉本町一丁目１番５号
03-3430-1111（代表）
頒布価格　200円

狛江市刊行物登録番号　R6－16